

優秀賞

ちよっと変わった誕生日

香川県 高松市立太田中学校二年 山本 風将

僕の家の誕生日はちよっと変わっていると思う。好物がたくさん食卓に並び、歳の数だけろうそくが灯ったケーキ、プレゼントとお祝いの言葉：僕の家ももちろん同じだが、ここからがちよっと違う。

まず、食事をしながら両親が思い出話を始める。「お兄ちゃんがお腹をさすりながら、話しかけたり、歌を歌ってくれた」「生まれる日は皆心配で、病室で待っていた。一番に抱っこしたのはお父さんで、二人目なのにぎこちなかった」など、お腹にいる時や生まれた日の事、その時の家族の様子、今迄の成長の過程等、毎回同じ様な内容を話しては「大きくなったなあ」と涙ぐむ。特に、「風将は食わず嫌いで、ご飯を食べさせるのに苦労したし、ちよっとでも口の中が嫌な感じになると、今迄食べた物も全部出していたから、毎回洗面器を横に置いて食事していた」という今では想像もつかないこのエピソードは、親

戚から聞く事もあるほど有名だ。そこへ兄が話を重ねてきて盛り上がり、妹が驚いたり羨ましがったりする。僕は両親がまるで昨日の事のように話す事、又、「この時どうだった?」「僕は?」「私は?」と聞いても、子供が三人いるにも関わらず、すぐに答えられる事に愛情の大きさを感じる。

次にベースデイソングを歌ってくれて、ケーキのろうそくを吹き消し、「誕生日おめでとう」というお祝いの言葉の後に「生んでくれてありがとう」と両親に言うこと。これは兄が小さい頃に言い始め、それが僕や妹にも伝わり、今迄、儀式のように続けている言葉。この言葉を言うと両親がとても喜んでくれるのだが、十二歳と十三歳の誕生日には照れくささがあり誤魔化して言わなかった。もちろんそういう気持ちは持っているし、日頃から感謝の気持ちは伝えていくつもりだし、あえて誕生日に言わなく

ても…と思ったのだ。兄に

「ちゃんと言えよ。」

と急かされ続けながらもなかなか言わない僕に、

「無理して言わなくてもいいよ。」

と母が助け船を出してくれてその場は収まったものの、母の寂しそうな顔に少し胸が痛んだのを覚えている。

先日、久しぶりに小さい頃のDVDを見た。毎日の様子を日記のように写してくれていて、両親が話す事がそのままDVDに残っている。僕が生まれる日も見た。帝王切開での出産なので、よくある出産のように、母が痛がったり、苦しんだりする様子はないが、点滴に繋がれ手術室に入る様子、それを三歳前の兄が泣きながら追いかけている様子、生まれたばかりの僕が保育器に入れられて出てくる様子が写っていた。たくさん人の愛情に包まれて生まれてきた事、大切な人に出会えた事に感謝でいっぱいだ。

夏休みが終わると、僕は十四歳の誕生日を迎える。

今度は両親に心から言おうと思う。

「生んでくれてありがとう。」

